地域の底力を信じ、市民一人一人をローカルヒーローに!

ながののNPOと市民をつなぐ機関誌

まんまる

特集 今なぜ「協働」なのか？

●まんまるニュース
●Myストーリー　とよの被災者支援チーム集楽元快（しゅうらくげんかい） 代表 清水 厚子さん
●ねぽが行く！突撃となりのＮＰＯ　長野手話サークル
●お宝ざくざく地域を掘り起こせ！　第二地区・若槻地区
●まんまるイベントスケジュール

「協働」をテーマにした交流会の参加者

2025 冬号 No.43

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

市民協働サポートセンターは SDGs を推進しています

特集

今なぜ「協働」なのか？

地域社会には少子高齢化、環境、災害、障害者支援、生きづらさなど、実にさまざまな課題が存在します。それぞれの課題は複雑に絡み合っているため、単独の組織や個人による取り組みでは解決が難しいのが現実です。これらの課題に対処するためには、行政、企業、NPO、学校、市民など地域のプレイヤーが連携し、「協働」することが不可欠なのではないでしょうか。長野市内での取り組みを例に「協働」について考えます。

学生ボランティアの活動で生まれた地域協働の形

ブドウ収穫の様子

10月上旬、つくば開成学園高等学校のボランティア委員会は長野市浅川地区でワインブドウ収穫のボランティアを行いました。委員会が活動を始めたのは初夏のこと。学生たちは「あのブドウがこんな大きくなってうれしい」「小さな実の摘果が大変だった」と話しながら収穫作業に励みました。

同校では「学生たちが継続的に地域で力を発揮できる場がないか」と、ボランティア委員会の発足を検討していました。市民協働サポートセンターに相談したところ、高齢化に悩む浅川地区の草刈活動を知りました。地区内外の人々に出会った担当教員は、地区の魅力や課題を実感したそうです。

その後、同地区で活動する「チーム・フロンティア浅川」の協力を得て、授業の中で地区の魅力と課題、ボランティア活動の役割などを学んだ学生たち。学生3人を中心にボランティア委員会としての活動がスタートし、ブドウ園での作業や清掃活動に参加しながら、同地区との交流を深めてきました。

活動中は学生と地域の人がお互いの想いを話す場面もあり、そのなかで自分の進路にあらためて向き合った学生もいました。「ボランティア活動を通じて、学生たちが地域に必要とされ感謝される体験をし、またそこでの出会いによって人生にかかわる進路の決断をした。学校内だけの勉強ではできないこと」と、同校の赤羽史教諭は話します。

学生たちは地域で活動をすることで、自分が役に立つという貴重な経験と学びを得ました。一方、地域は学生に課題解決を助けてもらっただけでなく、活力をもらったと言います。ボランティアを通して地域の課題を実感し、お互いの想いを語り合って交流を深めたからこそできた協働の形です。

夢が膨らんだ「ふうせんの会」

会話がはずみ、なかなか帰れません

10月上旬、小田切交流センターで、地区住民18人がおしゃべりと食事を楽しみました。

集まりの名は「ふうせんの会」。発起人は「家に閉じこもりがちの人が外に出る機会を作りたい」と思っていた西原アヤ子さんです。月に2回ほど交流する場を持てないかと考えていたところ、「好きな料理でならお手伝いしたい」と賛同してくれる友人が現れました。住民有志が集まり、地域の未来を楽しく考える懇話会で発案すると、他の人も「おもしろそう！」「やってみようよ！」と後押ししてくれたそうです。

いざ開催してみると、用意したおにぎりが全てなくなる盛況ぶり。ある人が持ち寄ったポテトサラダが大人気で「おいしい！どうやって作ったの？」という質問に、「使っている砂糖の量を聞いたらびっくりするよ」と答え、みんなが大笑いする場面も。漬物のコツや生活の知恵、地区に迷い込んだ旅人の話など、話題も笑いも尽きませんでした。「来たら絶対笑って帰ってもらえる場所にしたい。そうなれば、その後も足を運んでくれるはず」と考えていた西原さ

んも大きな手ごたえを感じたと言います。

集まった人の話も笑顔も大きく膨らんだ「ふうせんの会」。会の名前に込められた想いを実現したのは、「やってみたい」を声にした西原さんを、「手伝いたい」「やってみよう」と後押しして、できることと得意なことを持ち寄ってくれた仲間たちでした。これからもみんなの「やりたい」で小さな協働が生まれ、夢が大きく膨らんでいくことでしょう。

世代を超えて、過去を未来に語り継ぐ

「自分史を綴り語り継ぐ会」では、毎年、終戦記念日の8月15日に「玉音放送と戦争体験を聞く集い」を開催しています。集いでは「玉音放送」を聞き、戦争を生き抜いた会員が語り部として戦争体験を伝えています。今年で14回を数えました。

2025年は終戦から80年。語り部の高齢化が進み、会場へ足を運べなくなったり、年々声が細くなったりしています。同会事務局の細川順子さんは、「語り部を若い世代へとつなげたいという思いが強くなってきていた」と話し、市内の複数の高校に朗読ボランティアを呼びかけました。しかし、応募がない状況が続いたそうです。

そこで、市民協働サポートセンターに相談したところ、2人の高校生とつながりました。2回の練習を重ねて当日を迎えた高校生たち。「会員のみなさんそれぞれに人生のドラマがあることを知ることができ、一歩踏み出してみて良かった」と、ボランティアに参加した高校2年生の丸山和奏（わかな）さんは話しました。

集会の参加者からは、「若者が心を込めて読む姿に心打たれた」という声が聞かれました。「二人の高校生がとても真剣に向き合ってくれた。敬意と感謝の気持ちでいっぱい」と細川さん。「強制ではない〝協働〟の良さにあらためて気づいた。来年も積極的に呼びかけたい。すでに募集も受け付けています！」と話しました。

朗読に挑戦する丸山和奏さん

地域との連携で学びを豊かに！～協働の事例から～

12月1日、長野県立大学にて「地域との連携で学びを豊かに！～協働の事例から～」と題した交流会が開催され、市民活動団体や学生ら約50人が参加しました。

長野市では高校生や大学生を対象とした地域活動体験プログラム「ながの地域まるごとキャンパス（以下、まるキャン）」を実施しています。市民活動団体などが地域の魅力を再発見できるボランティアプログラムを提案し、学生と市民活動団体との協働によりさまざまなものが生み出されています。この日は、各団体がまるキャンでの活動を発表したほか、活動を通じて生まれた協働事例を紹介しました。

市民活動団体「被爆体験を聴く会」では、「ヒロシマの過去を学び平和を考えよう！」と題したまるキャン向けプログラムを提案し、2人の高校生が参加。高校生は映画「ひろしま」上映会の実行委員会に加わり、SNSを広報に活用する提案や、上映会プログラムとして「平和へのアクション」を検討したとのこと。同会代表の土田昇さんは、「シニア団体に新鮮な清々しい風を吹き込むことができ、平和活動を活性化できた。世代を超えて平和への思いが共有できてよかった」と、学生との協働が活動を次世代へ引き継ぐ足がかりとなったことを語りました。さらに、「上映会を多くの人と協力してつくりあげることにとてもやりがいを感じた。参加した方々と一緒に平和について深く考え、平和への意識が高まっていくのを目にすることができた」という高校生の声を紹介しました。

交流会の最後は、グループごとに新聞紙タワーを作るゲームを通じて「協働」を体感。参加者からは、「思ったより大変」「最初にコミュニケーションを取るのが大事だと痛感した」などの感想が聞かれました。

※参加者の集合写真は表紙

新聞紙タワーで「協働」を体感！

寄稿

「協働」ってなんだろう？

長野県立大学
ソーシャル・イノベーション創出センター
センター長　東　俊之

「協働」という言葉が、だんだんと一般的に使われるようになってきたように思います。筆者が専門とする経営学では、実は古くから“Cooperation”の訳語として「協働」が使われてきました（C・I・バーナード著、山本安次郎・田杉競・飯野春樹訳『新訳経営者の役割』ダイヤモンド社、1968年）。原著は1938年）。ここで使われている「協働」は、〝組織の中で人々が力を合わせて働く〟という意味です。

一方で、最近耳にする「協働」は、「組織と組織のつながり」や「組織の枠を越えた関係」をイメージすることが多いのではないでしょうか。“partnership”や“coproduction”、また“collaboration”などの訳語としての協働です。

組織と組織の協働（組織間協働）が注目されるようになってきた理由の一つは、多様化・複雑化する社会課題を、単独の組織で対応するやり方では解決できないと認識されるようになってきたからです。

しかし、例えば行政・NPO・企業・学校など、立場の違いによって見えている「協働」が異なっていることがあります。ある組織は対等な関係だと考えていても、別の組織は〝やらされ感〟を持っている、ということも考えられます。

そこで筆者は、「協働＝コラボレーション」と捉えるべきだと思っています。立場や考えの違いはあるが協力して新しい〝もの〟を創り出す、それがコラボレーションです。もう少し詳しく、組織と組織とのコラボレーションは、「参加する各組織が持つ専門技術や知識、考え方、文化や歴史など（＝資源）を組み合わせて、より大きな価値（＝相乗効果）を生み出すこと」であると考えています。

新聞紙タワーづくりに参加する筆者（写真右）

また、組織間協働（コラボレーション）を発展させていくために　①対等性・平等性の確保　②目的・ビジョンの共有　③組織間・組織内主要メンバー間の相互理解と相互信頼　④相互学習・相互変容による共進化　⑤新しい価値観の創造、の5つの特徴があると指摘されています（佐々木、2009）。このポイントを押さえつつ、組織間協働をマネジメントしていくことが求められます。

そして、目的を達成した場合には、当然協働を継続する必要はないですが、例えば一つのイベントだけで「社会課題」が解決できるかというと、なかなかそうは考えられません。別のイベントの実施や新しい課題の解決が求められます。このような〝更なる協働〟をスムーズに実行するために、関係する組織どうしの「緩やかなつながり」を常に確保しておくことも大切です。

ここまで「協働」の概念ならびに要点を考えてみました。皆さんの活動の参考になれば幸いです。

〈参考文献〉
佐々木利廣（2009）「組織間コラボレーションの可能性」佐々木利廣、加藤高明他『組織間コラボレーション』ナカニシヤ出版。

取材を通じて感じたのは、協働のきっかけに規模の大小は関係ないということです。最初は個人の想いや課題意識から生まれた小さなつながりが、やがて大きな力となり、ムーブメントとなることがあります。

市民協働サポートセンターは、これからも小さなきっかけを大切にしながら、皆さんの協働をサポートしていきます！

まんまる NEWS

活動を言語化して他団体へ発表

NPOステップアップ講座「補助金を活用してまちづくりに挑戦しよう！」

NPO ステップアップ

9月28日、長野市の「ながのまちづくり活動支援事業補助金」の募集に先駆け、資金調達について学ぶ講座を開催し、市民活動団体や住民自治協議会ら11人が参加しました。

前半は、過去の補助金採択団体が申請で奮闘した点やプレゼンの注意点など〝申請のリアル〟を披露。地域の民話をカタチに残す活動を続ける「若穂民話の会」は、補助金を使って民話集を作成し、地域活性化につなげています。同会の穂谷真弓さんは、「目的・目標・手段を明確に」「補助金額は毎年減額するので計画的に」など、申請時のポイントを挙げました。

後半は、「どんな活動なのか」「なぜやるのか」を言語化して、他団体に発表。相手から意見をもらって客観的な視点を得ます。「専門用語を使っていないか？」「納得感があるか？」を意識しながら真剣に発表する参加者の姿が印象的でした。

最後に補助金審査委員長の三浦 正士さん（長野県立大学）より、「まちづくりとは何か？」などについて話がありました。審査で重要視しているのは、「公益性・独創性・発展性・自立性・実現性・積極性」の6点とのこと。「熱のこもった申請書を期待しています」と参加者にエールを送りました。

参加者からは、「採択団体の情熱に感銘を受けた」「今後の活動に活かせそう」などの感想が寄せられました。

臨時ボランティアサロン開催！

作業中の様子

毎月第4火曜に開催しているボランティアサロン。「自分ができる範囲で誰かの役に立ちたい」「誰かと交流したい」という目的で集まるボランティアメンバーと一緒に、封筒作りや新聞バック作りなどを行っています。

今回は「ちょっと手伝ってほしいことが…」との相談を受け、11月12日に臨時ボランティアサロンを開催しました。内容は長野市障害福祉課（長野市障害ふくしネット子ども部会）が発行している「情報ツウー」という冊子の発送作業。急きょ開催したにも関わらず、いつものメンバーがたくさん集ってくれました。

封筒に宛名を貼る作業では名簿に間違いがないか確認したり、関係団体ごとに分類したり、とても丁寧に作業をする皆さん。冊子の封入やのりづけは機関誌発送と同じ作業なので手際も良く、予定時間より早く終了。「もう終わっちゃったの？仕事が少ないよ～、もっとやりたいのに」と声が上がるほどでした。

市民協働サポートセンターではボランティアサロンを通じて市民の参加の場を創っています。お仕事募集中です！ボランティアサロンへの参加もお待ちしています！

#31 Myストーリー

とよの被災者支援チーム集楽元快（しゅうらくげんかい）

代表　清水 厚子さん

清水厚子さんは、令和元年東日本台風（19号）で甚大な被害を受けた豊野地区に暮らしています。被災後、「誰もが困難の中にいるはず」「誰もが明かりが灯るまちを取り戻したいはず」と、「あったか食堂」「まちの縁側ぬくぬく亭」「集楽元快（しゅうらくげんかい）」を仲間と共に立ち上げ、地区住民の心の復興活動に取り組んできました。

「困っていることをなんとかしたくなっただけ」と言う清水さん。60歳で県職を退職するまでの38年間は一貫して福祉畑を歩み、ケースワーカーとして多くの人の〝困っていること〟を支援してきました。その経験から言える言葉です。

被災時、自宅は床下浸水でしたが、次男宅は186センチの床上浸水。駐車場に建てたテントに食事を運んでいた清水さんは、同じように大変な思いをしている周りの家を見て、「一緒に食べませんか?」と声をかけました。次第に、駐車場は炊き出し場のように。さらに、生活用品も衣服もない状態をなんとかしたくなり、友人知人に声をかけて集めた物資を「リンゴの湯」で無償提供しました。この時の仲間と共に今も活動を続けています。

それより以前の2014年、小隣互（こりんご）と称した、誰でも立ち寄れる「まちの縁側」を開所。きっかけは、認知症で入院していた母が口にする「お茶飲みしてえなぁ」。近所の人たちとの交流を懐かしんでいる母の想いをなんとかしたかったのです。外出許可をもらった母は、訪れる人たちとお茶飲みができました。

清水さんには常に保持している1台の携帯電話があります。支援している若者が助けを求めて掛けてくるからです。つながりの重要さを人一倍認識し、実感している清水さんの「なんとかしたい」という想いは今も熱く続いています。

取材・執筆　市民ライター　佐藤テイ子

プロフィール

1951年生まれ。精神保健福祉士、社会福祉士。防災交流センターにコミュニティガーデンを造ろうと中学生らと取り組んでいる。被災した家の庭にあった植木や草花で埋め尽くす予定。

団体情報

とよの被災者支援チーム集楽元快
https://toyonohukkou.wixsite.com/syurakugenkai2

長野手話サークル

「手話ができる聴者（聞こえる人）の仲間がほしい」という聞こえない人たちの願いにより、昭和45年10月31日に発足した長野手話サークル。「聞こえない人たちの暮らしを豊かにする」という目的のもと活動を続けています。

定例会は市内3会場で毎週開催しています。定例会では聞こえない人との交流のほか、上級、中級、初級、入門のグループに分かれての学習もしています。また、交流を大切にしていて、一般の人が参加できるレクリエーションも盛んです。発足から55年目となる10月31日には、ハロウィンにちなみ仮装してのボウリング交流会を開催。33人が参加し、手話でいろいろな人が交流しながら楽しくプレーしました。

活動は年間を通して行っていて、見学は自由です。興味のある方の参加をお待ちしています。

長野市障害者福祉センターで行われた学習会の様子

代表：松本　浩美
連絡先：naganoshuwa1970@gmail.com

お宝ザクザク 地域を掘りおこせ！

第二地区＆若槻地区

地域たんけんゲーム

第二地区

第二地区住民自治協議会は10月12日、地区内の名所・旧跡・商店などをロゲイニング方式で歩く「地域たんけんゲーム」を開催し、9チーム42人が参加しました。

ロゲイニングとは、地図を元にエリア内に設置されたチェックポイントを制限時間内にできるだけ多く回って得点を競うゲーム感覚のスポーツです。ロゲイニングを通して、地域の人に旧跡や見どころを知ってもらおうと昨年に引き続き企画。今回は区長お薦めスポットも追加されました。

秋晴れの中、スタート地点の城山公園には残り3分前からゴールのチームが殺到。一番乗りでゴールした家族は、「もともと神社やお参りが好きで、低学年の子どもが学校からもらってきたチラシを見て、参加しました」。赤ちゃん連れで参加した夫婦は、「城山公園周辺を家族で歩くことが出来て良かった」と笑顔で話しました。また、「知らない場所を知ることができて楽しかった」と話す女子高校生のグループもありました。

企画にあたっては長野県オリエンテーリング協会の協力のもと、夏にはポイントの写真撮影を終わらせるほどの力の入れようでした。

表彰式の様子

エディブルガーデン ～東徳間畑から～

若槻地区

手作りのかわいい看板に、緑鮮やかな野菜が空に手を伸ばしているような畑。ひときわ目を引くのは、かつて善光寺平で栽培が盛んだった里芋「さといも善光寺」です。生い茂る葉は小さな傘になりそうなほどの大きさ。畑の責任者を務める柿嶌昇（のぼる）さんは、「あと10日ほどたったら皆で収穫をして、芋煮として味わうのが楽しみ」と語ります。

青空に映えるエディブルガーデン

ここは、「東徳間エディブルガーデン」。町中が畑ともいわれるイギリスのトッドモーデンの取り組みをモデルにした畑です。いつ誰が来ても、収穫しても、食べてもよく、畑を中心とした地域活性化を目指しています。固定種の野菜を栽培し、農薬を使わずに有機肥料を与えることも特徴です。種採りも自分たちで行い、翌年の栽培へつなげています。

2023年、市立長野高校で開催された市民講座で講師を務める坂口則夫さんから、「市立長野での野菜づくりに区のみなさんも参加しませんか」と誘われたことがきっかけだそう。まずは農業の知識を深めようと住民がその講座に参加し、今年春から東徳間地区でのエディブルガーデンが始まりました。

毎週木曜に都合がつくメンバーで手入れを続けています。来年度は親子が参加しやすいように休日に活動日を設け、近隣の幼稚園とも交流したい考えです。「畑も広げ、地域の特色ある野菜を作りたい」と柿嶌さんは話しました。

まんまる 市民協働サポートセンター スケジュール 2025年 1月▶3月

タイトル	日　時	会場／費用	内　容
NPO ステップアップ講座 「組織のチカラを引き出す！ 持続可能な組織基盤づくりの ヒントを学ぼう！」	2月1日㈯ 13:30~16:30	もんぜんぷら座 304 会議室 参加費：1,000 円 （1 団体 2 人まで。 追加 1 人につき 500 円） 定員：20 団体 対象：市民活動団体、住民自治協議会など	創始者であるカリスマ代表が突然、卒業宣言！さぁどうする!? ざわつく自団体と対話を通じた丁寧なコミュニケーションで組織体制を見つめ直した経験を持つ山崎宏さんを講師としてお迎えします。前向きなコミュニケーション形成や組織基盤づくりのために何ができるのか？講師の経験談を聞きながら、自団体に活かせるヒントを講義とワークを通じて学びます。
地域まんまる 「地域の未来を考える！ 自治会って何してる？」	2月6日㈭ 13:30~16:00	柳原交流センター大学習室 （長野市小島 804－5） 参加費：無料 定員：50 人 対象：区長や副区長をはじめとした自治会役員、住民自治協議会、関心のある人なら誰でも	地域に昔からある「自治会・町内会」が何をしているのか、区費がどんなことに使われているのか知っていますか？ 知っているようで実は知らない？自治会の役割や取り組み、区費についてをあらためて知り、情報交換をする交流会を開催します。
NPO 初歩講座 「NPO ってなんだ？」	3月8日㈯ 10:30~12:30	市民協働サポートセンター 参加費：300 円 定員：5 人 対象：誰でも	ボランティアって何？ NPO ってなんだ？などの基礎知識から、NPO 法人の成り立ちや設立についてお話します。また、市内の活動紹介も。
NPO カフェまんまる 「お祝いごとの料理から世界を知る！」	3月8日㈯ 14:00~16:00	ながの若者スクエア 「ふらっとｂ」 参加費：無料 定員：20 人 対象：誰でも	近年、多くの外国人観光客が訪れる長野。長野で暮らす外国人も多く、同じ地域で暮らしを共にすることが当たり前になっています。お互いに関心をもち、理解するきっかけの場として、市民、市民団体、企業等のつながりを世界の「食」を通して深め、地域づくりにつなげます。
まんまるボランティアサロン ①ボランティアさん集まれ！ ②機関誌発送サロン	①毎月第 4 火曜 11:00~14:00 ②3月 29 日㈯ 10:00~13:00	市民協働サポートセンターまんまる （もんぜんぷら座 3 階） 参加費：無料 対象：誰でも	まんまる開催のボランティアサロンです。「誰か」や「自分」のために、楽しく無理なくボランティアをしませんか？ 10 代から 90 代までいろんな人が活躍しています！ ①封筒や紙バックをカレンダーや新聞紙で作るなど、その日によって作業は変わります。 ②３ヶ月に１回発行するセンターの機関誌を発送する作業です。今回は土曜日！封筒へのラベル貼り、機関誌やチラシの封入をします。

開催方法などが変更になる可能性があります。ホームページやフェイスブックでも随時情報発信しています。あわせてご確認ください。

新スタッフ紹介

滝澤 典子

出身は名古屋ですが、長野には学生時代の山登りでハマりました。以前は病院ケースワーカー等をしていました。趣味は、多文化探訪と神社仏閣巡りなのでその辺に出没しているかも!?

まんまる はココに！

美容院
「HAIR SOEUR（ヘアースール）」

長野駅から車で8分、国道19号線沿いにある「ヘアースール」は落ち着きのある空間を大切にした美容院です。髪質や骨格だけでなくそれぞれの「こうしたい！」「こんな風になったらいいな」と向き合い、その人らしい髪型を一緒に考えます。「髪が綺麗になって気持ちも癒されリラックスできるよう心がけています」と話すのは店長の塚田容子さん。

オリーブオイルなど天然由来の成分が入ったオーガニックカラーも人気♪今度、癒されに行ってみてはいかがでしょうか？？

長野市高田五分一366-9コーポ伝田103　TEL026-217-5529　営業時間／9:00～18:00　定休日／不定休

発行 / **市民協働サポートセンター（長野市）**
TEL:026-223-0051　FAX:026-223-0052
〒380-0835 長野市新田町 1485-1 もんぜんぷら座 3 階
e-mail：npo@nagano-shimin.net
ホームページ：https://nagano-shimin.net/

編集後記

この原稿を書いている今、街中はクリスマスモード。息子がサンタさんにあてた手紙には、「サンタさん、すいませんがサッカーボードをください。すいません」と。プレゼントをもらえることを当たり前と思わず、謙虚に生きていく姿勢を学んだ今日この頃です。（足軽Ｔ）